

キャリア理論の分類学序説 —— 現代学校進路指導の基底にあるもの ——

野 淵 龍 雄

An Introduction to the Taxonomy of Career Theories
— Fundamentals of Modern School Career Guidance and Counseling —

Tatsuo NOBUCHI

はじめに

ここでキャリア理論とは、主として学校で行われる職業（進路）選択の指導および職業的発達（キャリア発達）の指導を中心とするキャリアガイダンス・カウンセリング（日本の場合は学校進路指導）の根拠となる理論一般を指している¹⁾。

また、キャリア理論の分類学ないしその類型的考察は、「地域的・国家的・国家圏的視点に立ち、民族の文化的背景に着目した類型的考察」を指向する比較進路指導学のひとつとされる²⁾。しかし、これまでに開発されてきたキャリア理論は欧米の理論が中心であったから、厳密な意味では、比較進路指導学としてのキャリア理論の分類学は欧米の理論間の比較研究が主たる内容とならざるをえない。

さて、キャリア理論の分類学は、「理論の理論」という意味においてメタ理論に属す（バットマン, W. とマクマホン, M., 1999）。そして、メタ理論としてみると、キャリア理論の分類学は、理論間の差異性、類似性、共通性等を推し量りながら理論を整理・分類する段階から、一步踏み込んで、各理論の理論としての成熟度を評価しながら理論の収斂化（convergence）、再編化（restructuring）、統合化（integration）の可能性を探る段階へと移りつつある。

本稿は、上述のようなキャリア理論の分類学の現状や動向を考慮に入れて、以下のような課題に迫っていきたい。

1. 欧米のキャリア理論の中から、現代のキャリアガイダンス・カウンセリングおよび学校進路指導に強い影響力を持つと思われる理論をいくつか取りあげ、それらの理論間の異同等を明らかにしながら、理論としての成熟や進展の方向性を見定めていく。
 2. キャリア理論に生じた「転回」（evolution）の事実を確認するとともに、それが実践上になどのような変動をもたらしたかを明らかにしていく。
 3. 現代学校進路指導をキャリア理論の転回の延長線上に置いたとき、それが理論としての成熟や進展にかなう実践となるためにはどのような契機が存在するか、その可能性を拓いてみる
- こと。

1. 現代のキャリア理論の諸類型とその類型的考察

欧米のキャリア理論の百年史には、少なくとも3つの大きな転換期のあったことが知られている。1つは、パーソンズ, F. の事績に代表される20世紀初頭の職業指導運動の草創期、2つは、1950年代にギンズバーグ, E., スーパー, D. E. らが職業的発達理論を提唱した時期、そして、3つは、主として1980年代以降の、ポストモダニズムを背景とする新キャリア理論が出現した時期である。

次頁の「表 現代キャリア理論の諸類型」(以下、「表」という。)は、およそ1世紀の間に現れた欧米(英国, カナダ, 米国)のキャリア理論の分類例を示したものである。

今、ここから、上述の3つの転換期を念頭に入れて現代のキャリアガイダンス・カウンセリングおよび現代学校進路指導に強い影響力を持つと考えられる理論を取り出すと以下のようになる。

第1群(1900～): 特性因子理論, パーソナリティ理論, 社会学的理論。

第2群(1950～): 発達理論, 認知的発達理論。

第3群(1980～): 解釈学的アプローチ, 生態学的理論。

以下、類型的にみたときの各理論の特質を捉えていく。

・特性因子理論; この理論は別名「マッチング理論」とも呼ばれるように、個人の心理的特性と進路先の要件(因子)とを適合させる方法を示すもので、パーソンズ, F. (1909)にそのルーツがあるとされている。以来、この理論はおよそ100年の歴史を持つが、その間、精神測定運動、職業情報理論、カウンセリング理論等の成果を取り入れ、理論としての体系化が進み、その精度も高めてきている。ロー, B. (1981)がこの理論を「科学的マッチング理論」として分類したのは、理論としての科学性を認めているからであり、ギンズバーグ, E. (1971)がこの理論を「適応理論」としたのは、むしろ、特性と因子の適合性に着目して、それが社会的・職業的適応の条件であるとしたからである。一方、バリー, R. とヴォルフ, B. (1962)は、この理論の本質は、特性と因子のマッチングの方法にあるから、理論というよりも「方法論」(Methodology)であるとしており、他の理論(パターン理論、動機理論、自己理論)との差異化を図っている³⁾。

・パーソナリティ理論; パーソナリティ理論は、個人の衝動や欲求、興味と性格、あるいは全体としてのパーソナリティが基本的にその個人の進路を方向づけ、決定づけるとみる理論である。古くは、発達の初期段階での基本的欲求(特に愛情と自尊への欲求)の充足・不充足のあり方がその個人の職業選択を水路づけるとしたロー, A. (1956)の精神分析学的理論、個人が選択する職業は、個人が最も関心のある要求を最もよく充足することができると信ずる職業であると説いたホボック, R. (1967)の要求理論、また、最近では、職業は、基本的に同じ型のパーソナリティを持つ人々によって占められていると考え、パーソナリティと職業との照合関係を明らかにしたホランド, J. L. (1970, 1973)の理論、個人の自己像の中心にあってその個人が最も放棄したがる欲求・動機・能力・価値観等の集合である「キャリア・アンカー」(career anchor)の存在を認め、その社会的・職業的実現を期したシャイン, E. H. (1991)の理論などがこの類型に入る。

パーソナリティ理論は、パーソナリティという個人の特性を明らかにし、その社会的・職業的実現を目指しているとみれば、これを特性因子理論の一種とすることができる。「表」において、ハックマン, R. B. (1965)が、ホランドの理論をマッチング理論として類型化したの

キャリア理論の分類学序説

表 現代キャリア理論の諸類型

分類者（年）	理論の類型（研究者）
ロックウエル, P.J. とロスニィ, J.W.M. (1961) - 職業指導運動の草創期	社会改良主義（パーソンズ, F.） 社会福音主義（デーヴィス, J.） 社会進化論（リード, A. とウィーヴァー, E.W.） 新しい科学論（ヒル, D.S.）
バリー, R. とヴォルフ, B. (1962)	方法論（パーソンズ, F.） パターン理論（ビューラー, C., ギンズバーグ, E., ミラー, D.C. とフォーム, W.H., スーパー, D.E.） 動機理論（ロー, A.） 自己理論（ロジャーズ, C.R., スーパー, D.E.）
ハックマン, R.B. (1965)	偶然理論・運命論（ミラー, D.C. とフォーム, W.H.）・ 衝動理論（ブリル, A.A.）・試行錯誤説 マッチング理論（パーソンズ, F., ホランド, J.L.） パーソナリティ理論（ロー, A., その他の精神分析学者） 自己概念理論・同一性理論（ギンズバーグ, E., スーパー, D.E., ティードマン, D.V. とオハラ, R.P.） 意思決定理論（ジェラット, H.B.）
オシボー, S.H. (1968)	特性因子理論（パーソンズ, F.） 社会的モデル（カプロー, T., ホリングスヘッド, A. B., ミラー, D.C. とフォーム, W.H.） 自己概念・発達理論（ビューラー, C., スーパー, D.E., ギンズバーグ, E., ロジャーズ, C.R.） パーソナリティ理論（ホボック, R., ロー, A., ホランド, J.L.）
スーパー, D.E. (1969)	発達理論 ① 職業的成熟理論（スーパー, D.E., クライツ, J.O.） ② 自己概念と役割に関する理論 ③ 役割理論 構造理論 ① 人間関係論（ロー, A.） ② 欲求理論（ボーディン, E.S. と彼の協力者） ③ 特性因子理論 ④ 多元的特性理論（フラナガン, J.C.） ⑤ 興味理論（ホランド, J.L.） ⑥ その他のアプローチ（ティードマン, D.V. とオハラ, R.P.）
ギンズバーグ, E. (1971)	適応理論（パーソンズ, F.） 発達理論（ギンズバーグ, E., ロジャーズ, C.R., スーパー, D.E.） 環境改善論（ボーイ, A.V. とバイン, G.J.）
ロー, B. (1981)	科学的マッチング理論（パーソンズ, F.） ヒューマンスティック理論（ロジャーズ, C.R., ロー, A., スーパー, D.E.） 機能主義（ロバーツ, K., その他の社会学者） コミュニティ理論・生態学的理論（ロー, B.）

ゾネンフェルト, J. とコッター, J.P. (1982)	社会階層説 (ホリングスヘッド, A.B., ミラー, D.C. とフォーム, W.H., ブラウ, P. とダンカン, O.D.) 個人差説 (ボーディン, E.S., ロー, A., ホランド, J.L.) キャリア発達段階説 (ギンズバーグ, E., ミラー, D.C. とフォーム, W.H., ティードマン, D.V. とオハラ, R.P., スーパー, D.E., シャイン, E.H.) ライフサイクル説 (エリクソン, E.H., レヴィンソン, D.J.)
コリン, A. とヤング, R.A. (1986) —理論の新しい方向性として	生態学的・システム論的アプローチ (ヤング, R.A. とコリン, A., ヴァンドラック, F.W., チェックランド, P.) 伝記的アプローチ (プラマー, K., ラニアン, W.) 解釈学的アプローチ (ショッター, J., ヤング, R.A.)
サヴィカス, M.L. (1995)	発達論的コンテクスチュアリズム (ヴァンドラック, F.W.) 発達論的システム理論 (フォード, D.H. とラーナー, R.M.) システム理論 (ブルースティン, D.L.) 学習理論 (社会的学習理論) 個人－環境相互作用理論 (P-E transaction) 職業適応理論 (デーヴィス, R. とロフキスト, L.)
ブラウン, D. とブルックス, L. (1996) —現代の理論として	価値観モデル (ブラウン, D.) 社会的認知理論 情報処理理論 コンテクスチュアリズム (コリン, A. とヤング, R.A.)
パットマン, W. とマクマホン, M. (1999)	サヴィカス, M.L. (1995) の分類にある6つの理論に加えて, 社会的学習理論 アクション理論
リャードン, R.C. (2000)	構造理論 (パーソンズ, F., ロー, A., ホランド, J.L.) 過程理論 (スーパー, D.E., クルンボルツ, J., ティードマン, D.V. とオハラ, R.P.)

「表」は、筆者が1991年に行った進路指導理論の分類(仙崎武・野々村新・渡辺三枝子編著「進路指導論」, 福村出版, 所収)に、それ以降の年代のものを加えながら再編したものである。ただし、1991年の上記文献にあったヒューワー, V.H. (1963) とヤング, R.B. (1988) の分類はここでは割愛した。「表」のロー, B. (1981) は英国, コリン, A. とヤング, R.A. (1986) はカナダ, その他は米国の分類である。

上記の諸分類のうち、サヴィカス, M.L. (1995) の分類及びブラウン, D. とブルックス, L. (1996) の分類にある「コンテクスチュアリズム」(Contextualism) は、変化する人間と変化する文脈(環境)との相互作用を動的に捉える理論であり、システム理論、アクション理論と多くの共通点がある。

なお、分類者および理論の類型にある研究者と関連する文献は、紙幅の都合等で「注および参考文献」に出てくるもの以外はここでは割愛した。

はその例である。

・**社会学的理論**；社会学的理論は、個人が属する社会階層、社会的・経済的地位、所属集団と準拠集団、文化、社会的・経済的・技術的変動、雇用情勢、一般的に社会的文脈が個人の進路選択・決定過程に及ぼす影響力に関心を払う。「表」の社会学的モデル、社会階層説、機能主義、偶然理論・運命論等がその例である。最近では、コミュニティ理論やコンテクスチュアリズムのように、個人と環境、個人と社会的文脈との相互作用に一層の関心を払った新しい社会学的理論が出現している。

・**発達理論**；この理論は、特性因子理論のように、進路の選択・決定をひとつの「出来事」(an event, a one-step operation) とみるのではなく、「発達の過程」(ギンズバーグ, E., 1951), 「多くの心理的要因と社会的要因との相互作用の過程、それらの統合の過程を含むダイナミックな過程」(スーパー, D.E., 1957) として捉えたところに大きな特色がある。そして、この場合、一般的には自己、または自己概念の発達の過程が焦点となっているから、発達理論は、事実上、自己概念理論であるといえる。

スーパーによれば、「自己概念」(self concept) は、個人の自分自身に対する認知、自分自身の置かれている状況に対する認知、そして、個人が世界を解釈する仕方を含んでいるとされるから、その本質は、「個人が自分で捉えた自分自身についての映像」(現象学的自己像) であるとみなすことができるのである。この自己概念の発達の過程は、青年期までは、自己概念の「形成」(formation) - 「置き換え」(translation) - 「実現」(implementation), の過程、青年期以降、全ライフスパンでは、自己概念の「修正」(modification) - 「適応」(adjustment) の過程として理解される^{4) 5)}。

発達理論の内容は、パターン理論、自己理論、ヒューマニスティック理論、自己概念・発達理論など別名称で分類される理論と基本的に同じである。

・**認知的発達理論**；自己概念という言葉の意味内容からみて、自己概念理論はすでに「認知的発達」(cognitive development) の要素を含んでいるが、「認知的発達理論」として分類されるときは、一般的には、「意思決定理論」(decision making theory) と「社会的学習理論」(social learning theory) を指している。前者は、意思決定に含まれる要素や考える手順等をシステム化したものであり、後者は、模倣学習、観察学習、モデリングなど、広く社会や人間関係のなかの学習を中心に理論化したものである⁶⁾。ブラウン, D. とブルックス, L. の分類にみられる社会的認知理論と情報処理理論はともに認知的発達理論として分類してよいものである。

・**解釈学的アプローチ**；「解釈学的アプローチ」(hermeneutical approach) は、コリン, A. とヤング, R. A. (1986) がキャリア理論の新しい方向性を示すものとして注目した理論のひとつである。それは、この理論が、発達理論を含めた従前の理論よりも個人と環境の両面および両者間の相互作用過程をより動的に捉えている点で理論としての成熟度が高いとみたからである。ここで、解釈の対象として選ばれたのは、個人が日々行っている実際の行為や経験であり、それについて語られた言葉や物語であった。いわば日常性、刻々と変化していく日常の出来事や事態に目を向けたのは、その中にこそ存在論的意味、生きる意味や将来の展望とパースペクティブが引き出されるべきものとして内在していると考えられるからであるが、そのためには、解釈するその人が、自分の眼で事態をありのまま見ることができ、既成の枠組みや生き方、一般原則から解放されていること、など一定の条件が必要とされる^{7) 8)}。一解釈学的アプローチが「ポストモダニズム」(postmodernism) の側に立つとされるのは、その背後にこの客観主義や理

論モデルからの自由の精神が存在するからである⁹⁾。

解釈学的アプローチのキーワードは、さしあたり、「意味」(meaning)「実際の行為」(practical activity) —パッカー, M.J. (1988) —, 「人間の行為」(human action) —コリン, A. とヤング, R.A. (1992) —である。

解釈学的アプローチと関連性の強い理論には、一般的には、生態学的理論、システム理論、コンテクスチュアリズム、特殊的には、伝記的アプローチ、アクション理論、ナラティブアプローチなどがある。

・生態学的理論；生態学的理論は、生物と環境の関係を研究する「生態学」(ecology) の考え方を援用して、人間のキャリアの発達を理解し説明しようとする理論的試みである。この理論の有用性は、解釈学的アプローチと同様に、キャリア理論の核心部分にあたる個人と環境の相互作用をより全体的に、よりダイナミックに捉えることができる点にある。

今、メタファーを用いてこの理論の特徴を述べると、個人が進路を選択・決定する際の規準は、その個人がそこで生きる意味が発見できるような最適環境となっているかどうかという点に求められる。ここで、「最適」というのは、生物の生息環境としてのニッチがそうであるように、必ずしも個人がその環境に完全に適合しているとか、完全な満足を得ているといったことを意味するものではない。それは、多少ともそこに負の要素が存在するとしても、その個人がそこで生きる意味が発見でき、個性的に、また十分に自分らしく生きることができる限りにおいて最適であるということである。そのために、この理論が重視するのは、個人が周囲の環境と広く深くかかわり合うこと、自然、事物、人間、技術、情報等を含んだ世界とかかわり合い、自分を世界と結びつけるその能力である。

生態学的理論は、コミュニティ理論、システム理論、コンテクスチュアリズム、アクション理論などとの関連性が強い¹⁰⁾。

2. キャリア理論の転回とその実践的意義

(2-1)：以上でみたキャリア理論の類型的考察から言えることは、理論上、これまでに少なくとも2回の重要な転回があったということである。1回目は、特性因子理論から発達理論への転回であり、2回目は、発達理論から解釈学的アプローチへの転回であった。

1回目の転回を引き起こした主要な原因は、職業(進路)を選択するということの意味の捉え方の違いにある。特性因子理論は、これをワンステップで完了する1つの出来事とみて、選択する時点での個人の特性と進路先の要件・因子とを一致させることを目指した。これに対して、発達理論は、これを、自己概念を実現する手段を選択することとして捉えた。この違いは、実践上は、一方が個人の特性の測定、進路に関する情報の提供、および指示的助言に力点を置いたのに対して、他方が自己概念の形成—発達に向けた援助としての治療・カウンセリングを重視する、といった違いとなって現れている^{11) 12)}。

ここで、治療・カウンセリングとは、スーパー, D.E. によると、非指示的助言と指示的助言とを折衷・循環させて行う職業カウンセリングを指している。「循環方式」(cyclical method) のカウンセリングとは、クライアントの感情をそのまま受容する⇒進路に関する必要な情報を提供する⇒クライアントの体験を共感的に理解する⇒進路を選択・決定する際に考慮に入れるべき事柄や考える手順等について助言する、というように非指示的助言と指示的助言を交互に取り入れて実施する方法である¹³⁾。

かくして、自己概念の実現に向けた指導は、個人の心理的特性の測定、進路情報の提供、指

示的助言等に頼った指導だけでは不十分となったのである。それどころか、職業的成熟・発達を評価する指標として作成された進路成熟尺度等の活用を加えてもなお十分とはいえなくなった。自己概念の実現に向けた指導の条件としては、これらすべてを含め、さらに個人の自己概念の形成－発達の指導、延いては個人のパーソナリティの統合や再体制化に向けた治療やカウンセリングを加えてはじめて必要十分な条件となるからである¹⁴⁾。

一方、発達理論から解釈学的アプローチへの転回が真に意味するものは何であったろうか。解釈学的アプローチの核心部分は、個人の日常の経験や実際の行為を取りあげ、その意味を問うことにあった。その意味とは、さしあたり、a)「手もとのものとしての日常の経験とその意味」(ready-to-hand narrative)、b)「問題の所在、不安な状況とその意味」(unready-to-hand-narrative)、c)「目のまえのものとしての問題解決の見通しと対処」(present-at-hand narrative)、の3つの内容にかかわっている、と考えられている¹⁵⁾。

解釈学的アプローチの特色は、このように、経験に意味を付与すること、いわば経験の意味化を図ることにあるといえるが、このことを進路の選択・決定過程についていうと、個人が自分の進路選択・決定という経験を、一度、既成の枠組みや一般原則から解き放し自由となって、自分の眼で主体的に捉え直し、それが持つ自分にとっての真の意味を明るみに出そうと努めることであるといえよう。

「手もとのもの」から「目のまえのもの」に至るこのひたむきな自己探求の過程は、しかしながら、解釈学的アプローチだけのものではないことに注意を向けなければならない。たしかに、解釈学的アプローチは、個人が自らの経験の意味を読み解くことを目指しているが、このことは、発達理論という自己概念、または現象学的自己像の実現ということと論理的にも、実践的にもつながっていると考えられるからである。実際、解釈学的アプローチによって進められる指導では、個人が日常の経験自体を自分の眼でよく見て、それを自分の言葉で表現し物語るのを助けるが、この指導の過程は、そのまま、現象学的自己像の形成－発達とその実現を助ける過程と重なると考えられるからである。もしそうであるなら、発達理論から解釈学的アプローチへの転回は、かえって、発達理論への本質的回帰として捉えるべき側面があるということになる。この時、解釈学的アプローチは、発達理論に基づく実践に不可欠な治療やカウンセリングと深くかかわり合って、経験の意味化という視点からその内容をさらに豊かにすることに寄与すると考えられるのである。

(2-2)：今や、発達理論に基づく治療やカウンセリング、また、いわば「物語としてのキャリア」や「ナラティブ」の方法が、果たして、地域的・国家的・国家圏の差異を“越境”し、日本の現代学校進路指導の方法となり得るか否かが問われなければならない。

この時、最も熟慮すべき点は、欧米にあっては、キャリアガイダンス・カウンセリングは教師も行うであろうが、一般的にはカウンセラーという専門家が対応するという制度的仕組みがあるのに対して、日本の場合は、それが、通常、学校の教師によって担われているという点である。－解釈学的アプローチは別にして、発達理論がわが国に紹介・導入されて久しいが、理論と実践との間にズレが生じている。その原因の多くは、発達理論に基づく実践に不可欠な治療やカウンセリングを実施する制度的仕組みが学校に用意されていないことにある。－したがって、当面、学校の教師が進んで取り組むことができ、かつ、現段階での最適な方法、すなわち、キャリア理論の理論としての成熟の方向にかなっているか、または、それからあまり大きく逸脱しない形で展開できる実践のあり方を求めることが必要となっているのである。

ここで、現代学校進路指導をやや構造的に捉えてみたい。その全体を層化してみると、現代学校進路指導は、「理論の層」、組織的・計画的に行われる「実践の層」、そして随時の指導・相談を中心とする「日常性の層」の3層から成るものとして捉えることができる。

このうち、「日常性の層」—ここは、進路指導にかかわる人々の本音、無意識、意識、信念等が、時には隠され、時にはあらわにされる場でもある。—は、現代学校進路指導を根底から支えたり、崩したりする層であるだけにその進め方には特に留意しなければならない。それは、この「日常性の層」の内容となる教師の生徒に対する接し方や語り口が、「ケア」(care and caring)として作用し、生徒の心理的支えとなり、その自発的な進路探求意欲を高めることもあれば、逆に、それが生徒にネガティブに作用し、進路探求意欲をかえて減退させてしまうことがあるなど、生徒への影響が大きいと考えられるからである。そして、今日、「日常性の層」、随時の指導・相談がケアの場となるように構成し直すことが現代学校進路指導のむしろ差し迫った課題となっているのではないだろうか^{16) 17)}。

同時に、こうようにして教師によって行われるケアは、その展開によっては、発達理論、延いては解釈学的アプローチに基づく実践へと繋がる契機となる可能性もある。

たとえば、全ライフスパンのうち、中学校在学期、高等学校在学期に焦点づけてみると、この時期の生徒が特定分野の職業に対する能力・適性・興味等が顕著となったり、情熱の焦点となるような「キャリア・アンカー」が出現したことが認められたときは、教師はこのことをそのまま受容するとともに、それを継続して探索するよう勧める、あるいは、将来の進路選択への不安や疑いが強くなったり、アイデンティティの危機に遭遇しているとみられる生徒に対しては、教師は、この生徒を共感的に理解するように努めるとともに、明日の、近未来の目標と一緒に見つけようと勇気づける、こういったことがケアとして作用し、発達理論に基づく指導・援助、自己概念の形成—発達とその実現に向けた循環方式のキャリアカウンセリングへと進んでいくことも期待できるのである¹⁸⁾。

また、進学すべき上級学校の選択・決定に迷っているとみられる生徒に対しては、たとえば、「その学校があなたの将来の生き方にかかわる具体的な学校かどうかを一緒に考えよう。」といって、教師が生徒にとってケアの体現者である「メンター」(mentor)として働く用意のあることを伝えるような語り口は、教師と生徒の人間関係の質を変え、相互の対話を促進させることがある¹⁹⁾。そして、その結果、生徒の内部にも変化が生じ始め、学校選択という経験の真の意味、近未来における自己の生とキャリアの意味化が進むということがある。この時、教師が行う随時の指導・相談は、たしかにケアとして作用していると考えられるのであるが、この指導が進展すれば、解釈学的アプローチでいうところの「手もとのもの」から「目のまえのもの」へという読解の過程に踏み込んでいくことも不可能ではないであろう。

ここでは、随時の指導・相談がまずケアとして作用するように、「日常性の層」の見直しを図ることが、現代学校進路指導を改善するための大前提であることを指摘したのである。

結びに代えて

パットマン、W. とマクマホン、M. (1999) は、現代のキャリア理論を「内容理論」「過程理論」「内容・過程理論」(content・process theory)の3つに分類している。内容理論は、個人の属性や特性、環境要因や文脈等、進路の選択・決定の際に考慮すべき内容を中心に理論構成したもので、特性因子理論やパーソナリティ理論がこの分類に入る。過程理論は、進路選択・決定の過程を全ライフスパンにわたるプロセスとみるところに特徴があり、発達理論や意思決

定理論がその典型である。内容・過程理論は、内容理論と過程理論の持つ性質を合わせたもので、解釈学的アプローチと既述のこれと関連性の強い理論がここに含まれる²⁰⁾。

この分類法によると、たとえば、ブラウン、D. とブルックス、L. (1996) の分類にある「価値観モデル」は内容理論、「情報処理理論」は過程理論、「社会的認知理論」と「コンテクスチュアリズム」は内容・過程理論として分類し直すことができる。その他のものについても同様に、この分類法による分類が可能である²¹⁾。

このような視角からみると、キャリア理論の収斂化、または再編化は、さしあたり内容・過程理論によって実現されそうである。けれども、現段階では、内容理論や過程理論—そこでは、「部分理論」(segmental theory) や「狭い専門の学派」(narrow school) の理論が中心的役割を果たしている。—が内容・過程理論に吸収されたり、それによって止揚されているわけではなく、それぞれに独自の位置を占めているのである²²⁾。このことを別の角度から立証しているのがリャードン、R. C. (2000) たちの分類である。ここでは、キャリア理論は、「構造理論」と「過程理論」と2分されるが、事実上、前者は特性因子理論、後者は発達理論に対応していて、むしろ、内容理論や過程理論を際立たせたものとなっている²³⁾。

したがって、現段階では、内容理論（または過程理論）か内容・過程理論か、部分理論か理論の収斂化（または再編化）か、といった問題の立て方は適切ではないであろう。むしろ、キャリア理論の理論としての成熟度を高める方向を見据えながら、内容理論（または過程理論）と内容・過程理論、部分理論と理論の収斂化の間の連続性と非連続性を明らかにすることが先立つ課題となっているといえよう。

ひるがえって、日本の現代学校進路指導は、生徒の進路未決定・不決断、不本意入学、進路変更、中途退学、不登校生徒の進路問題、モラトリアム現象など、いくつもの実践上の困難な問題や課題を抱えている。この時に当たり、問題や課題の性質、複雑さや困難さを勘案しながら、類型的に捉えられた欧米のキャリア理論を基底にして、これを選択的に援用し、その問題や課題の解決に迫るということがあってよいであろう。

本稿は、キャリア理論の中でも、特に特性因子理論、発達理論、解釈学的アプローチに着目して、それらの間の連続性や非連続性を明らかにしつつ、現代学校進路指導の実践的契機や可能性を試論的に述べたものである。

注および参考文献

- 1) 「キャリア」の概念や定義はなお一定しないが、スーパー、D.E. がこれを「人がその生涯を通して取得する種々の役割の結びつきであり連鎖である」と定義して以来キャリアについての共通理解を生み、とくにキャリア発達研究の促進に寄与するところとなった。——Super, D.E. (1980), A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development, *Journal of Vocational Behavior*, 16., 283-284.
- 2) 小林達夫 (1971), 進路指導理論に関する一研究——とくに進路選択理論について, 東京水産大学論集, 第6号, 17. ここで、小林氏は、職業選択理論の類型的考察を行い、わが国におけるキャリア理論の分類学の先駆的役割を果たした。
- 3) マッチング理論 (特性因子理論) の原型となったパーソンズ、F. の理論の背景には、職業指導によって青少年の失業や貧困、不平等などの社会問題を解決するという「社会改良主義」(social reform) の考え方があったが、その後の職業指導では、こうした社会思想の側

- 面は希薄となり、マッチング理論のもつ方法論のみが引き継がれた。しかし、21世紀に入ると、様相はやや変化していて、職業指導（キャリアカウンセリング）を行うカウンセラーは、社会を変えるエージェント（オブライエン, K.M.）、ソーシャルワーカー（サヴィカス, M.L.）たるべきといった主張にみるように、パーソンズに還ろうとする動きがみられる。
- 4) ここで、「形成」は、自己と周囲の環境や世界の探索、自己と他者との差異化、生き方のモデルとの同一視や現実吟味といった過程を含んでいる。「置き換え」は、「私はあの人のようになりたい」のように、自己概念を職業的用語に移し換えることであり、「実現」は、就職や進学等によって、自己概念を現実の世界に生かすことを指している。また、「修正」は、状況の変化に対応して自己概念に変更を加えることを、「適応」は、広く社会生活や職業生活の中で、期待される役割上の変化に自己を適合させることを意味している。——Super, D.E. (1968), Vocational Development Theory; Persons, Positions, and Processes, Counseling Psychologist, July., Vol.30., 2-9.
 - 5) スーパーは、成人のキャリア発達過程を、はじめは、「適応」の過程を中心に捉えたが、後に、これを「アダプタビリティ」(adaptability)に変更している。これは社会の急激な変化に対応したものであり、用語自体はピアジェ, J. の認知発達に関する理論、とくに「調節」の考え方から示唆を得ていて、単なる「適応」の概念よりも新たな応用力や自己変革力のある概念として使用している。——Super, D.E., Knasel, E.G. (1981), Career Development in Adulthood; Some theoretical problems and a possible solution, British Journal of Guidance and Counselling, 194-199.
 - 6) Keller, K.E., et al. (1982), Career Counseling from a Cognitive Perspective, The Personnel and Guidance Journal, Feb., 367-371.
 - 7) Collin, A., Young, R.A. (1986), New Directions for Theories of Career, Human Relations, Vol. 39., No.9., 837-853.
 - 8) Collin, A., Young, R.A., (1992), Constructing Career through Narrative and Context; An Interpretive Perspective, In Young, R.A., Collin, A. (Eds), Interpreting Career; Hermeneutical Studies of Lives in Context, Praeger, 1-12.
 - 9) Thorngren, J.M., Feit, S.S. (2001), The Career—O—Gram; A Postmodern Career Intervention, The Career Development Quarterly, June., Vol.49., 291-303.
 - 10) 野淵龍雄 (1997), 進路指導理論の再構築——生態学的アプローチの学校進路指導への寄与——, 椋山女学園大学研究論集, 第28号, 社会科学篇, 315-322.
 - 11) マッチング理論に基づく実践の有力な拠り所となったのが、ウィリアムソン, E.G. の指示的助言の考え方であった。それによると、カウンセリングは、基本的に、分析—総合—診断—予測—処置といった手順・方法によって進められるという。——Williamson, E.G. (1939), How to Counsel Students, McGraw—Hill Book Co., および、同氏の1964年の論文, An Historical Perspective on the Vocational Guidance Movement, The Personnel and Guidance Journal, Vol.42., 854-859.
 - 12) スーパーは、自己概念理論の建設および循環方式のカウンセリンの確立に際して、ロジャーズ, C.R. から大きな影響を受けたことを認めている。また、彼は、結果的に自分の理論は従前の特性因子理論に基づく職業カウンセリング（職業指導）と心理療法とを橋渡しする役割を果たしたと主張している。——Super, D.E. (1955), Transition; From Vocational Guidance to Counseling Psychology, Journal of Counseling Psychology, 3-9., および、同

- 氏の同年の論文, *Personality Integration through Vocational Counseling*, *Journal of Counseling Psychology* Vol.2., No.3., 217-226.
- 13) 日本職業指導協会 (1962), 職業的発達理論の研究, 職業指導研究セミナー報告書, 127-128.
 - 14) スーパーは, パーソナルカウンセラーやキャリアカウンセラーといった特定分野の専門的なカウンセラーではなく, どの分野の問題領域や場面にも柔軟に対処できる幅広い能力・資質をもったカウンセラーの養成に期待をかけた。—Super, D.E. (1993), *The Two Faces of Counseling, or Is it Three? The Career Development Quarterly*, Vol.42., 132-136.
 - 15) Packer, M.J. (1988), *Hermeneutical Inquiry in the Study of Human Conduct*, *American Psychologist*, Oct. 1081-1093., および, Collin, A., Young, R.A. (1992) の論文, 前掲書 (注8), 1-12., また, 「手もとのもの」「目のまえのもの」等については, ハイデッガー, M. 著, 桑木 務 訳 (1961), *存在と時間* (中) (下), 岩波文庫. 参照.
 - 16) 野淵龍雄 (2000), 21世紀に向けた進路指導の諸課題——3層構造の視点から——日本進路指導学会第22回研究大会 (於: 愛知教育大学) における基調講演配付資料, および, Young, R.A., Vallach, L. (1996), *Interpretation and Action in Career Counseling*; In Savickas, M.L., Walsh, W.B. (Eds), *Handbook of Career Counseling Theory and Practice*, Davies-Black Publishing, 361-375.
 - 17) Paul, J.L., Smith, T.J. (2000), *Stories Out of School; Memories and Reflections on Care and Cruelty in the Classroom*, Ablex Publishing Co., 1-63.
 - 18) レン, G.C. は, カウンセラーがキャリアカウンセリングを行う際の態度として, クライアントを「全人」(a whole person) として扱うこと, 自尊の感情を高めること, 近未来の目標を立てるように勇気づけることを重視したが, ケアの本質もまたカウンセラーのこのような態度と関係があると考えられる。—Wrenn, G.C. (1988), *The Person in Career Counseling*, *The Career Development Quarterly*, Vol.36., No.4., 337-342. また, ケアの本質については, ノディングス, N. の次の著書を参照。Noddings, N. (1984), *Caring; A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press. — (1992), *The Challenge to Care in Schools; An Alternative Approach to Education*, Teachers College Press. これらにおいて, ノディングスは, ケアの本質が, 他者への専心 (engrossment) と他者において生きること (motivational displacement) にあること, ケアは, また, 他者へのケアのみではなく, 自己, 自然, 事物, アイディアへのケア等, 広がりをもって完結することを明らかにしている。
 - 19) メンターは, オデュッセイアーの息子テーレマコスの家庭教師の名である。学業の他, 将来の自立に向けた社会的, 職業的体験の指導にも力を注いだといわれる。メンターは, ケアを司る女神アテネの転身した姿ともいう。—Schwiebert, V.L., et al. (1999), *Women as Mentors*, *The Journal of Humanistic Counseling, Education and Development*, Vol.37., No.4., 241-253.
 - 20) Patton, W., MacMahon, M. (1999), *Career Development and Systems Theory; A New Relationship*, Brooks/Cole Publishing Co.
 - 21) Brown, D., Brooks, L. (Eds) (1996), *Career Choice and Development* (3rd ed.), Jossey-Bass Publishers, 337-512.
 - 22) スーパーは, 自ら唱えた自己概念理論 (職業的発達理論) は, 「部分理論」であり, 「個人

差の」(differential)－「発達の」(developmental)－「社会的」(social)－「現象学的」(phenomenological)という各部分から成ること、各部分の働き、学際性や総合性の背後にあってそれらを支える個別専門分野の視点こそが重要であるとし、彼の自己概念理論を総合理論とのみ見て各部分を見ようとしない傾向を戒めた。この戒めは後の部分と全体の関係をホーリスティックに捉える諸理論、とりわけ、システム理論、解釈学的アプローチなどに生かされている、と考えられる。――Super, D.E. (1968), 前掲書(注4), 参照。

- 23) Reardon, R.C., et al. (2000), Career Development and Planning; A Comprehensive Approach, Brooks/Cole Publishing Co.